

# 球根

寺田寅彦

青空文庫



九月中旬の事であつた。ある日の昼ごろ堅吉けんきちの宅うちへ一封の小包郵便が届いた。大形の茶袋ぐらいの大きさと格好をした紙包みの上に、ボール紙の切れが縛りつけて、それにあて名が書いてあつたが、差出人はだれだかわからなかつた。つたない手跡に見覚えもなかつた。紙包みを破つて見ると、まだ新しい黄木綿きもめんの袋が出て来た。中にはどんぐりか椎しいの実みでもはいつているような触感があつた。袋の口をあけてのぞいて見ると実際それくらいの大さの何かの球根らしいものがいつぱいはいつている。一握り取り出して包み紙の上に並べて点検しながらも、これはなんだろうと考へていた。

里芋の子のような肌はだあい合あをしていたが、形はそれよりはもつと細長くとがっている。そして細かい棕櫚しゅろの毛で編んだ帽子とでもいったようなものをかぶっている。指でつまむとその帽子がそのままですぼりと脱け落ちた。芋の横腹から突き出した子芋をつけているのもたくさんあった。

子供らが見つけてやって来ていじり回した。一つ一つ「帽子」を脱ぎ取って縁側へ並べたり子芋の突起を鼻に見立てて真書きしんが筆でキューピーの顔をかき上げるものもあった。

何か西洋草花の球根だろうと思つたが、なんだかまるで見当がつかなかった。彼はわざわざそれを持って台所で何かしている細君に見せに行ったが、そういう物にはさっぱり興味の無い細君は

ろくによく見る事もしないで、「存じません」と言っただけで相手になつてくれなかつた。老母も奥の隠居部屋いんきよべやから出て来て、めがねでたんねんに検査してはいたが、結局だれにもなんだかわからなかつた。

「ひよつとしたら私の病気にでもきくといふのでだれかが送つてくれたのじゃないかしら、煎せんじてでも飲めといふのじゃないかしら」こんな事も考えてみたりした。長い頑固がんこな病氣を持ってあましている堅吉は、自分の身边に起こるあらゆる出来事を知らず知らず自分の病氣と関係させて考えるような習慣が生じていた。天性からも、また隠遁いんとんてき的な学者としての生活からも、元来イーゴイストである彼の小自我は、その上におおっている青白い病のヴェ

ールを通して世界を見ていた。

もつとも彼がこう思ったのはもう一つの理由があつた。大学の二年から三年に移つた夏休みに、呼吸器の病気を発見したために、まる一年休学して郷里の海岸に遊んでいたころ、その病気によくきくと言つてある親戚しんせきから笹百合ささゆりというものの球根を送つてくれた事があつた。それを炮烙ほうろくで炒いつてお八つの代わりに食つたりした。それは百合ゆりのような鱗片りんぺんから成つた球根ではあつたが、大ききや格好は今度のと似たものであつた。彼はその時分の事をいろいろ思い出していた。焦げた百合の香ばしいにおいや味も思ひ出したが、それよりもそれを炒つてくれた宿の人々の顔やまたそれに付きまとうた淡い口マンズなどもかなりにはつきりと思ひ

出された。その時分の彼はたとえ少々の病氣ぐらいにかかっても、前途の明るい希望を胸いっぱいにいただいていただけに悲觀もしなければ別にあせりもしなかった。そして一年間の田舎いなかの生活をむしろ貪欲どんよくに享樂していた。それが今、中年を過ぎた生しょうが涯がいの午後に、いつなおるかかわからない頑固な胃病に苦しんでいる彼の心持ちは、だいぶちがったものであつた……のみならず今度の病氣は彼の外出を禁じてしまったので前の病氣の時のように、自由に戸外の空氣に触れて心を紛らす事ができない。使えば使われそうに思われるからだを、なるべく動かさないようにしていなければならぬのが苦痛であつた。それでもはたで見るとほど退屈はしていなかつた。彼の読書欲は病氣になつて以来いっそう増進して、

ほとんど毎日朝起きるとから夜寝るまで何かしら読んでいた。そんなになに本ばかり読んでいては病気にさわりはしないかと言つて、細君や老母が心配して注意する事もあつたが、彼自身にはそんな心配はないと言いはつていた。実際彼の頭脳は病氣以来次第にさえて来て、終日読書していても少しも疲れないのみならず、自分でも不思議に思うほど鋭く働いていた。何か読んでもそこに書いてある事の裏の裏まで見通されるような気がしていた。読んで行く一行一行に、あらゆる暗示が伏兵のように隠れていて、それが読むに従つて、飛び出して襲いかかるのであつた。それらの暗示のどれでも追求して行くとほとんど無限な思索の連鎖をたぐり寄せる事ができた。そしてそれらの考えがほとんど天啓でもある



ように強く明らかに、無条件に真であつて、しかもいづれもが新しい卓見でもあるように彼には思われた。新聞の三面記事を読んでいる時でさえ時々電光のひらめくようにそのような考えが浮かんだりした。そんな時には手帳の端へ暗号のような言葉でその考えの端緒を書き止めたりしていた。しかしそのような状態はいつまでも持続するわけではなくて、これと反対な倦<sup>けんたい</sup>怠の状態も週期的に循環して来た。そういう時には何を讀んでも空虚であつた。そこに書いてある表面の意味をとらえる事すら困難であつた。そうした時に手帳をあけて自分の書いてある暗号のようなものを見ると、ほとんどなんの意味をも成さない囁<sup>たわごと</sup>語でなければ、きわめて月並みないやみな感想に過ぎなかつた。どうしてこんなつ

まらない考えがあれほどに自分を興奮させたか不思議に思われるのであった。それでひよつとすると自分は一種の誇大妄想狂こだいもうそうきように襲われているのではないかと思つて不安を感じる事もあつた。そういう時の彼はみじめな状態にあつた。世界を埋め尽くした泥どろの底に自分がうごめいているような気がしていた。しかし再び興奮の発作が来ると彼の頭は靈妙な光で満ち渡ると同時に、眼界をおおつていた灰色の霧が一度に晴れ渡つて、万象が透き通つて見えるのである。

このように週期的に交代する二つの世界のいずれがほんとうであるかを決定したいと思つて迷つていた。——おそらく彼は生しょう涯がいこのわかりきつたようで、しかも永久に解く事のできないな

ぞを墓の中まで持ち込むかもしれないなかつた。

彼の生活が次第次第に実世間と離れて行くのを自分でも感じていた。彼と世間を隔てている透明な隔壁が次第に厚くなるのを感じていた。そしてその壁の中にこもつて、ただひとり落ち着いて書物の中の世界を見歩き、空想の殿堂を建ててはこわし、こわしてはまた建てている時にいちばん幸福を感じるようになって来た。彼は時々そのような生活の価値を疑つてみない事はなかつたが、しかしどうにもならないと思つていた。この隔壁は自分で作ったものでもなければだれかが持つて来たものでもなかつた。そうしてひとりできたこの壁を打ち破るといふ事ができるとしても、その努力は今の健康が許さないと思つていた。そう思つてむしろ

安心しているそばで、またこうしてはならないという不安の念が絶えず襲いかかって来た。利己的であると同時に気の弱い彼は、少なくとも人目にはたいした事ではないと思われるらしい病気のために職務を怠っている事に対する人の非難を気にしていた。それで時々彼を見舞いに来る友人らがなんの気なしに話す世間話などの中から皮肉な風刺を拾い上げ読み取ろうとする病的な感受性が非常に鋭敏になっていた。たとえば彼と同病にかかっているながら盛んに活動している先輩のうわさなどが出ると、それが彼に対する直接の非難のように受け取られた。そうした夜は夜ふけるまでその話を分析したり総合したりして、最後に、その先輩と自分との境遇の相違という立場から、二人のめいめいの病気に対する処

置をいずれも至当なものとして弁明しうるまで安眠しない事もあった。またたとえばある日たずねて来た二人が自分たちの近ごろかかった病氣の話をしているうちに、その一人が感冒で一週間ばかり休んで寝ていたが、実に「いい気持ち」であつたと言つて、二人で顔を見合わせて意味ありげに笑つた。そのような事でさえ彼の血管へ一滴の毒液を注射するくらいな効果があつた。二人が歸つて後にぼんやり机の前にすわつたきりで、その事ばかり考えていた。そういう時には彼の口中はすっかりかわき上がつて、手の指がふるえていた。そうして目立つて食欲が減退するのであつた。彼自身にも、それが病的であるという事を自覚しないではなかつたが、その自覚はこのような発作を止めるにはなんの役にも

立たなかつた。そんな時に適当な書物を読めばいいことも知っていたが、発作のはげしい時には書物をあけて読もうと思つて努力しても、心はすぐ書物を離れて、もとの暗やみへずり落ちて行つた。むしろその暗やみへ向かつて飛び込んで行くと、ある時間の後にはどこからか明かりがさして来て夜の明けるようになるのであつた。

同じように人から来る手紙の中の言葉などにもかなりに敏感になつていた。またたとえば絵はがきの絵や、見舞いの贈り物などからさえも、ほとんど他人には想像もつかないような「意味」を感得する事があつた。

そういう状態にある彼は、今この差出人の不明な、何物とも知

れぬ球根の小包を受け取って無頓着むとんちゃくでいるわけにはゆかなかつたのである。

彼は一度紙屑籠かみくずかごへほうり込んであつた包み紙やひもや名あて札をもう一ぺん検査して見た。ひもにはりつけた赤い紙片の上にはつてある切手の消印を読もうとして苦しんでいたが、消印はただ輪郭の円形がぼんやり見えるだけであつた。「実に無責任だなあ」郵便局に対する不平を口の内でつぶやきながら、空虚な円の中から何かを見いださうとして、ためつすがめつながめていた。

失望の後に来る虚心の状態に帰って考えてみると、差出人のおよその見当は、もう小包を手にした瞬間からついていたのであつた。郷里にいる二人の姉のいずれかよりほかに、こういう物を

送つて来そうな先は考えられなかった。去年の秋K市の姉から寒竹の子を送つてくれた事、A村の姉からいつか茶の実をよこした事などが思い出された。そう言えば前にも今度と同じような鬱金<sup>うこん</sup>木綿<sup>もめん</sup>の袋へ何かはいつて来た事も思い出したが、あいにくそれがどちらの姉だったか思い出せなかった。

あて名の手跡は二人の姉のとはまるでちがっていた。しかし、二人ともにそうだが、ことにK市の姉はよく孫のだれかに手紙の上封などをかかせる事があるからと思つて、戸棚<sup>とだな</sup>の中から古手紙の束を出して来て、いくつかの姉の手紙を拾い出して比べて見た。K市の姉からのあて名の手跡の或る<sup>あ</sup>ものは小包のと似ているように思われた。たとえば「東」の字や、ことに「様」のつくりの



格好がよく似ていた。しかしまたよく見ると「町」の字などはかなり著しくちがつていて、全く同人の手であるとは断定しにくいようなところがあつた。一方でA村の姉のはほとんど自筆で、たまに代筆があつても手跡は全くちがつていてこのほうはほとんど問題にならなかつた。

「まだ研究していらつしやるの。……あなたもずいぶん変なかねえ。いまに手紙かはがきが来ればわかるじゃありませんか。」

台所から出て来た細君は彼が一心に手跡を見比べているのを見て、じれつたがつて、こう言つた。

「手紙のほう小包よりさきに來そうなものだが。」

「だって、そりゃあ、……あとから來る事だつてあるじゃありま

せんか。」

「……この『様』の字をちよつと比べて見てくれ。どうも同じ手だと思ふんだが……。」

「ええ、そうですよ。……きつとそうですよ。」

めんどろくさくなつた細君は無責任な同意を表しはしたが、それでも堅吉はいくらか安心したらしく、散らかした手紙をそろそろ片付けていた。

K市の姉からだすると、一つ思い当たる事があつた。彼女が去年まで家を貸してあつた中学教師のスイス人が毎年いろんな草花を作つていた。半分は楽しみであつたらうが半分は内職にしているらしいという事であつた。なんでも草花の種や球根を採つて

はY港のある商館へ売り込みに行くらしかった。その西洋人が去年シヤンハイへ転じて行く時に、姉の貸し家の畑へ置きみやげにいろいろなものを残して行つただらうという事は、きわめてありそうな事である。それがことしたくさん蕃はんしよく殖したのでこちらへも分けてよこしたものだらう。

そう考えると堅吉の頭の中が急に明るくなるような気がした。同時にこの球根がなんだという事もはっきりわかつたような気がした。「そうだ、フリージアだ。フリージアに相違ない。」

彼の意識の水平線のすぐ下に浮いたり沈んだりしていたこの花の名が急にはっきり浮き上がつて来た。それと同時に彼は始めに小包をひらいてこの球根を見た瞬間から、すでもう「フリージ

ア」という名がすぐ手近な所に隠れていたように思われだした。意識の深い奥のほうからこれが出よう出ようとするのを、不思議な、ほとんど無自覚な意志の力で無理に押えていたのだというような気がした。

なぜ「フリージア」という名が突然に現われたか。それには積極的と消極的と二つの理由があつた。第一前に言つたスイス人がいろいろの花のうちでもなかならずたくさんにこの花を作つていふという事を姉から聞いていた。その時に姉がこの名を妙な発音で言つた事も彼に特殊な印象を強めたのであつた。それでこの名がこの西洋人と球根という組み合わせに密接な連合をしていたのであつた。もう一つの消極的な理由はこうである。

堅吉は二三年前に今の家に引っ越してから裏庭へ小さな花壇の  
ようなものを作つて四季の草花などを植えていた。去年の秋は神  
田の花屋で、チューリップと、ヒアシンスト、クロツカスとの球  
根を買つて来て、自分で植えもし、掘り上げもしたので、この三  
つのはよく知っていた。そのほかにまだグラジオラスの根や  
アネモネの根もずっと前に見た記憶があつた。これに反して、偶  
然な回り合わせでフリージアの根だけはまだ見た事がなかつたの  
であつた。これまで花屋で鉢植<sup>はちう</sup>えの草花などを買う時に、この花  
は始終に目をつけていたにかかわらず、いざ買うとなると、どう  
いうものか、自分にはわからない不思議な動機でいつも他の花を  
買うのであつた。品のいい、においのいい花だと思つてほしがつ

ているくせに、いつでもそばの派手な花に引きつけられていた。それで彼はこれまで一度もこの花を自分の家の中に持った事もなく、それがどんな根をもっているかも知らなかった。ただそれが球根であるという事だけを単なる知識として知っていただけである。

今そう思つて見ると、この球根はそれ自身でいかにも、花として彼の知つているフリージアに適切なものらしく思われて来た。彼は球根のにおいをかいでみたりした。一種の香はあつたがそれは花のにおいを思い出させるものではなかつた。

フリージアだとすると、どこへ植えたものだろうと思つて考えていた。彼の過敏になつた想像はもうそれが立派に生育して花を

つけたさまを描いていた。某画伯のこの花を写生した気持ちのいい絵の事をも思い出したりしていた。

再び通りかかった細君に「オイわかったよ、フリージアだよ、これは……」と言つて説明しようとした。それからまた老母の所へ行つて植え付け場所を相談したりした。

翌日になるとはたしてはがきが来た。球根はフリージアに相違なかつたが、差出人は堅吉の思いもかけない人であつた。それはK市ではなくてA村の姉の三男が分家している先からであつた。平生は年賀状以外にほとんど音信もしないくらいにお互いに疎遠でいた甥おいの事は、堅吉の頭にどうしても浮かばなかつたのであつた。

しかしこう事実がわかってみると、堅吉の頭は休まる代わりにかえつてまた忙しくならなければならなかった。

第一には手跡の問題であった。小包のあて名の字は甥らしかった。それがどうしてK市の姉の手紙のあて名に似ているかが不思議であった。もしK市の姉の孫——この姉のむすこはなくなつていた——が手紙のあて名を書いたのだとすると、それがどうしてこれほどまでよく、その子供の父の従弟いとこのに似ているかが不思議であつた。しかしA村の甥おいがK市の姉すなわち彼の伯母おばのために状袋のあて名を書いてやったという事もずいぶん可能で蓋然がいぜんであるように思われた。しかしふたつの手跡は似ていると言いながら全く同じであるとは考えにくい点もないではなかつた。



もう一つのわからない事は、平生別に園芸などをやっているらしくもない——堅吉にはそう思われた——甥おいがどうしてフリージアの根などをよこしたかが不思議に思われた。どうも、このフリージアの種は、やはりK市の姉のほうから縁を引いたものではないかと思われてしかたがなかった。夫婦暮らして比較的閑散な田園生活を送っている甥が、西洋草花を栽培しているのは自然な事だと思っただけではなんだか物足りないように思われるのであった。

堅吉はすぐ甥にあててはがきを書いて、受取と礼の言葉を述べた末に、手跡の不思議と球根の系図に関する想像を書いてやった。なんとか返事があるかと思つて待つていたが十日たつてもついに来なかつた。考えてみると彼は別に返事を要求するようなふう

の書き方をしたわけではなかった。少なくとも甥のほうではそうは取らなかつたに相違ない。

もう一度わざわざそんなことを聞いてやるのも、おかしいと思つてそれきりにしてしまつた。

花壇の縁に植えた球根はじきに芽を出して勢いよく延びて行つた。堅吉はこの草の種を絶やさないのでおけば、いつかは彼の「不思議」を明らかにする機会が来るだろうと思つている。しかしそれは——だれが知ろう。

自分の内部の世界のすみからすみまでを照らし尽くすような気がしても、外の世界とちよつとでも接触する所には、もう無際限な永遠の闇が<sup>やみ</sup>始まる、という事がおぼろげながらも彼の頭に芽を

出しかけていた。

(大正十年一月、改造)



# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第一卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年2月5日第1刷発行

1963（昭和38）年10月16日第28刷改版発行

1997（平成9）年12月15日第81刷発行

入力：田辺浩昭

校正：かとうかおり

1999年11月17日公開

2003年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 球根

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>